

出典：加藤周一『文学の擁護』／一橋大学 03年

## 文章略解

先進工業社会では、都市化に伴う生活環境の細分化によって共同体が崩潰し、組織化によって人が没個性化し、大量生産商品の広告によって消費生活が規格化・被操作化する。また、情報量の加速的な増大に伴って、知識が専門化し、専門家が組織化され、教育の詰め込み主義から思考力が低下する。生活環境の変化と情報量の増大との両者を通じて現実が細分化され、社会の成員には全体的現実に対して現状適応主義をとることが必然となる。

## 解答

問1 A 〓 隔離

B 〓 愚劣

C 〓 規格

D 〓 著

E 〓 心臓

F 〓 総和

G 〓 培

H 〓 枠組

I 〓 提供

J 〓 成員

問2 共同体内の個人として熟練の技術や独自の信念によって少量で個性的な生産に携わる人。(40字・解答例)

問3 主体性と思考力を失って、没个性的に所与の商品と情報とに満足して生きる態度。(38字・解答例)

問4 細分化された専門分野では有能でも、他領域に無知で全体的現実が見えず、専門の意義も理解できない状態。(49字・解答例)

出典：遠藤利彦『喜怒哀楽の起源』／お茶の水女子大学 01年

文章略解

喜びや悲しみといった情動は、従来非合理的で動物的なものと考えられてきた。しかし、その本質は我々の「生き残り」を高度に保障する合理的な機能システムといってもよいものである。この考えは、フロイトやダーウインに負うところが大きい。特にダーウインの系統をひく人々によって、ヒトの情動表出は進化論と関連され、基本情動論として結実されるに至った。一方、情動を社会文化的起源を主張する論者たちは、この生得的な情動プログラムを批判的に見ている。

解答

問1 情動が「非合理かつ動物的であり理性や英知をただかき乱すものである」という考え方から「種々の合理的で適応的な行動を高度に支えるもので、多くの場合合理性と不可分に結びついたものである」という考え方への転換。〔100字・解答例〕

問2 情動表出(26行目)

問3 ヒトの情動表出を「進化論的な適応」という観点からはとらえていなかったダーウインを、あたかも最初に情動の適応論的合理性を主張したかのように曲解したこと。〔75字・解答例〕

問4 進化論的情動論は、現在では単に情動の表出だけでなく、神経生理学的なパターンや内的情感など、情動の他の側面に関する研究にも発展した学問領域の中心となっているから。〔80字・解答例〕

問5 最初Ⅱ「生き残り」 最後Ⅱ能システム(7行目)

問6 情動現象は、生物としてのヒトに共通の身体的性質に基盤を置くものだが、社会化の過程を通して社会文化に内在するルールを身に付けることで構成されるものとしての側面もあるから。〔84字・解答例〕

問7 生物としてのヒトの身体的性質は共通であるにも関わらず、実際の情動現象においては、社会文化の相違によって情動表出に文化ごとのバリエーションが確かに存在するということ。〔82字・解答例〕

問8 a 〓 静穏                      b 〓 容赦                      c 〓 彩り                      d 〓 随伴                      e 〓 不可分

解説

解説のはじめに、問題文の意味段落構造を確認しておく。評論文では、設問に対する解答要素を探すのに、意味段落構造に注目する必要がある。問題文はおよそ次のような構造で書かれている。

○第一～四段 情動論のパラダイム・シフト（近代から現代へ）

○第五～九段 進化論的情動論から基本情動理論へ（現代的情動論1）

- ・ 第五～七段 進化論的情動論
- ・ 第八～九段 基本情動理論

○第十～十三段 情動の社会文化的構成主義（現代的情動論2）

（ただし、第九段は第十段に対する《先行譲歩説明》の部分と見てもよい）

問1 傍線部1の中の「パラダイム」は設問文自体の中でも「考え方」と言い換えられているが、一般的な語義（辞書義）としては単なる「考え方」より意味の範囲が限定される言葉なので、「パラダイム」の辞書義にも注意する必要がある。日本語の評論文で使われる「パラダイム」は、「科学研究を一定期間導く、規範となる業績」の意味から、多くの場合「ある時代の人々のものの見方や考え方を根本的に規定している概念的枠組み」程度の意味に拡張して用いられ、簡単には「思考枠組み」などと置き換えること

ができる。またこの語は、「ひとつのパラダイムの中にあるとき、人は自分の思考を規定しているパラダイムの全体像がなかなか把握できない」といった含意をもちやすい。なお、傍線部に言う「パラダイムの転換」は「パラダイム・シフト」と表現されることも多く、この文章でも第五段1行目にある。(国語辞典で「パラダイム」を、また英和辞典で「paradigm」を引いて確認のこと。)

さて、傍線部直前には「情動をめぐる」という表現が見えるから、設問は「情動」にたいする『根本的な理解のしかた』の二種類を問題文中に探し、古いものから新しいものへの順にまとめよ」と要求していることになる。また、「情動をめぐる」の前には「こうした」という表現もあって、傍線部はそれ以前をまとめる形で書かれていることになる。さらに、傍線部の後には「どのような背景の下に生まれてきたのだろうか」とあって、これ以降の段落は「パラダイム」ではなく「パラダイムシフトの背景」を説明するために意味段落が変わることもわかる。よって傍線部以前の文章構造を確認すると、第一・二段と第三・四段がそれぞれ組になって同趣旨のことを反復しており、それぞれの前半の第一・三段では「従来の一般的な考え方・日常的な直感」を、後半の第二・四段では「新しくおこった考え方」を説明している。そこで、第一・三段の内容で答案前半を、第二・四段の内容で答案後半を構成する。

答案前半について。第一段はほとんどが例示なので、答案前半は実際には第三段の内容を用いるが、第三段3行目「例えば」から同7行目「とってしまったり」とまでもほぼ例示部分とみることができるから、同2〜3行目「人間をく見なされてきた」および同7行目「破壊的で無秩序で非合理的な情動」の部分をまとめればよい。なお、同4行目「東洋でも」以降には単なる例示ではない表現「情動はく人間のあるべき姿である」もあるので、ここにも一定の目配りが必要だが、前述の部分をまとめるときに注意する程度でよい。(そもそも評論文とは基本的に「ポストモダン」の立場からの『西欧近代』に対する批判」という枠組みで書かれる文章である。)

答案後半について。第四段の傍線部を含む文に先行するふたつの文は、どちらも「のである」で終わって、換言説明の形になっている。そこで前に確認した文章構造にそって、答案後半をまとめるには第二段の表現にも十分に配慮する。第二段では「環境への『適応』く機能システム」の部分が使えるので、これと第四段前半のふたつの文とを組み合わせてまとめればよい。(第二段2行目には「くではなく」とあるので、これ以前は答案前半に組み込むべき内容となるが、解答欄の大きさから、この部分に言及することの優先度は低いと考えてよい。)

なお、本問のような「変化」の説明は「違い」を述べるのだから、「対比」の説明法、すなわち「二者の説明のボリュームをほ

ほ等しく行うこと」を応用すべきだ。答案の字数配分が前者・後者のどちらかに偏ると説得力を欠くので、問題文がよほど特殊な文章展開をしていないかぎり、両者の説明に配分する字数を同程度とすることに注意しよう。

## 問2

先に確認した文章構造によって、傍線部2に言う「表情」の換言は、第五～九段に見つかることが期待される。とくに、この意味段落は第五～七段と第八～九段に二分されるので、まずは第五～七段に集中し、適切なものが見つかなければ第八～九段に目を拡げればよい。

設問は「表情」の言い換えを求めているから、右の範囲内で「四字ひとまとまり・体言止め」の表現を探すと、第五段「フロイト」「精神の病」「病の根源」「第六段」「もう一人」「脊椎動物」「情動表出」「ある時点」「系統発生」「第七段」「彼の思想」「アレنجジ」「生き残り」「情動研究」となる。これらを選択肢として「表情」にもっとも近いものを取ればよい。「表情」とは、漢文の基本知識を使って語の構成に注目すれば、「表された情」または「情を表すこと」のどちらかだ。すでに「情動表出」が見つかっているので、これを正解とする。

なお、設問文には「四字の語」とあるが、これは必ずしも「四字熟語」を意味しない。本問の正解はたまたま二字熟語を連結したものであったが、勝手な先入観にとらわれないように注意のこと。

## 問3

傍線部3は第七段にあつて「こうした」という指示語を含むので、前述のとおり本問でもまずは第五～七段に解答要素を求める。傍線部に含まれる「曲解」は「物事や他人の言動を意図的に取り違えて解釈すること、また、その解釈」をいう。第七段5行目には「『あたかも言ったかのように』彼の論考を曲げて」とあり、傍線部がここに関係することにはすぐに気付いたことだろう。ただしそれだけでは浅くなる。右の部分には「(くしまう)のである」とあるので、ここはすでに述べたことの換言として書かれている。したがって前を見ると、第七段3行目にも「くかのように祭り上げてしまふ」とあり、さらにその前には2行目「巧みにアレنجジしてしまふ」とも言っている。これらに注目して、「ダーウィンの本来の見解」と、それを曲解した「多くのダーウィニアン」の論じ方」とに分けて読み取っていこう。

ダーウィンその人の見解については、第六段4行目以降に「皮肉なことであるが、ダーウィン自身はくと考えている」とあるので、これをまとめればよい。ここには「ヒトの情動表出を、進化的な適応という観点からはとらえていない」とあり、これを第

七段冒頭の「彼の表情論を彼の進化論と（少なくとも表面的には）うまく合致するよう巧みにアレンジしてしまう」の部分と組み合わせれば、「曲解」の骨組みは明らかになる。解答欄の大きさもにらんでコンパクトな表現を探すと、第七段2行目の「情動の適応論的合理性」がもつともまとまっている。「情動」に対する「進化論における適応的な合理性」の見地からの判断が食い違うことを述べればよい。

念のためにここで注意したいのは、「曲解」の対象を「ダーウィン」と「ダーウィンの論考」とのどちらとして回答すべきかということである。傍線部にもっとも近い部分ではたしかに「彼の論考を」と書いてあるが、「曲解」の説明はここだけではない。右に見た第六段では「ダーウィン自身」と言い、第七段でも「結果的に」という表現の後にはやはり「ダーウィンをく人物であるかのように」と言う。さらに言えば、続く第八段冒頭でも「ダーウィンの、ある意味での曲解」とやはり人物に注目した表現をとっている。一方、第七段冒頭では「彼の表情論を」と言い、また傍線部直前ではこれまでも見たように「彼の論考を」と言っている。（ただし、『彼の論考を』を導く部分ではやはり「ダーウィンがく言ったかのように」としている。）総合すると「人物」と「論考」と言及の回数はほぼ等しいと見てよいので、本問では「ダーウィン」と「ダーウィンの論考」とのどちらを「曲解の対象」としてもよからうと判断できるが、『解答』では、全体として人物主体の表現のほうがやや多いことに鑑みて、「人物」を曲解したと表現してある。設問に答える際の基本的な態度としては、たまたま目に付いた一箇所飛びついてしまうのではなく、関連性の認められる箇所をすべて勘案してから判断することが肝要だ。

なお、設問要求は「何をどのように」と言っているだけなので、曲解の主体「多くのダーウィニアン」を答案に盛り込む必要はない。

**問4** 傍線部4を含む文は少々長いので、まず枝葉を払って文構造を確認しよう。傍線部を含む形で主語と述語に注目すると、「進化

論的情動論は、……統合的な理論の中に結実している」と言っている。またその「結実」の過程で「情動の他の側面に関する研究にも発展」していること、およびその「統合的な理論」が『基本情動理論』と呼ばれる「ことにもふれてある。「発展」して「結実」したのだから、「進化論的情動論」は「基本情動理論」の「原点」であったことになり、また、学問としての方向性の変更に

関する記述がとくに見られないことから、今も「進化論的情動論」は「基本情動理論」の「中心」にあることが推定される。さて、「統合」とは「複数のものを単一にまとめ合わせること」といった意味合いだ。したがって、答案の骨子としては「進化

論的情動論は複数の派生的な研究分野を生み出し、それらの学問領域の拡がりや進化論的情動論を中心にひとつのまとまりとなっている」ということを、設問の「なぜ」に対する回答として述べればよい。

解答欄の大きさに鑑みて、「原点としての進化論的情動論的特質」および「複数の派生的な研究分野」の双方について具体的な説明を加えたのが《解答》である。

### 問5

まずは設問の字数制限を確認する。設問では「三十字以内」としている。入試問題の「〇〇字以内」という指定は五字ないし十文字を単位として設定されるのが通例だから、これは「少なくとも二十一字以上、蓋然的に二十六字以上」を暗示している。

さて、はじめに確認してあるように、傍線部5を含む意味段落は、全体としては「進化論的情動論から基本情動理論へ」という「現代的情動論の動きとその背景」を説明する部分だ。しかし傍線部自体は、直前の「あるいは」による換言であることからわかるように「動きとその背景」ではなく、「情動現象の基本単位」に関する表現である。とすれば、換言箇所はかならずしも同一意味段落にある必要はなく、むしろ「情動現象」そのものを述べた部分、この問題文では初めの意味段落（第一～四段）を見るほうが早い。

また、傍線部には「適応」という表現があるが、これは同じ傍線部中に「生命維持」という語も見られ、また話題が進化論に係していることから、「生物の、環境への適応」を意味していることがわかる。さらに、傍線部末は「システム」となっているから、解答箇所も体言止めで「システム」あるいはその換言で終わっていることが期待される。こうしたことを念頭において初めの意味段落を見ると、第二段に「環境への『適応』」があり、その直後に「『生き残り』」ではじまって「機能システム」で終わる箇所が見つかるので、ここを抜き出せばよい。初めの鍵括弧から書きだすのを忘れないこと。

なお、念のために書いておくと、大学入試問題においては、傍線部に対する換言説明部の全部を書き抜かせる場合は別として、本問のように「はじめとおわりの〇〇字」などと指定があれば、解答用紙に書かなくてよい部分には（漢字書き取り問題など）他の設問がからんでくる場合もある。意味段落構造に注意すればある程度のしほりこみはできるのだから、該当の可能性のある箇所はまんべんなく目配りしておくとうい。

### 問6

まず、傍線部6に含まれる「非言語的」という術語（テクニカル・ターム）の意味を確認しておこう。字面を見るだけでは「言

語的ではない」という意味に過ぎないから、たとえば「感情的」だとか「音楽的」だとか、とにかく言語でないものに関することならなんでもよさそうに見えるかもしれない。しかしこの語はもともと「non-verbal」の訳語として定着した学術用語で、「話し言葉・書き言葉以外の」の意味合いで具体的には「表情やしぐさによる」といった意味を含んで「意思表出・表象・意思疎通」などの語に対する修飾語として用いられるのが普通だ。問題文では、傍線部中の「やりとりの微妙なずれ」という表現が前の行の「コミュニケーション・ギャップ」と対応することから、「非言語的な情動的」は「言語レベルの」と対になっていることが明らかだが、この程度の術語は受験生なら弁えておいて当然でもある。

さて、傍線部の「非言語的な情動的やりとりの微妙なずれ」の生ずる原因を問われているのだ。ここで、傍線部は「情動」に関する「やりとりのずれ」という「現象」を言うのだから、それが生ずる「原因」は「情動の表出および受容のしかたが人によって異なる」ことにあると考えるのが妥当だ。傍線部は「情動の社会文化的構成主義」を説明する第十〜十三段に含まれるからこの範囲に関連事項を探すと、まず傍線部の換言と見てよい表現として、第十三段に「情動の文化的バリエーション」がある。そしてこれに注目するのが「情動の社会文化的起源を主張する論者たち（「社会文化的構成主義者」と呼ばれる）」だとも言っている。とすれば、「社会文化的構成主義」の立場から「情動の表出」の前の段階である「情動の成立」のしかたを説明することで、傍線部に対する理由の説明となるはずだ。したがって、第十一段の表現に着目して制限字数内にまとめればよい。

さらに、解答欄の大きさに鑑みれば、答案前半に「前提条件」または「対比項目」のどちらかを付加することが望ましい。問題文では「社会文化的構成主義」は「進化論的情動論」および「基本情動理論」に対するアンチテーゼとして提出された考え方だということ述べているが、第十段には「情動に関わる現象一般が、何らかのハードウェア、すなわち生物学的基盤に支えられて生じていることを否定する論者はいない」という表現もあるから、この要素を対比的な補足説明部として組み込んでおこう。

#### 問7

傍線部7の前の行に「　の存在を強調することによって」とあるから、「批判の根拠」の関連事項としてまずここに注目する必要がある。「文化による情動現象の違いや、ある文化に特異的な情動現象の存在」が「批判の根拠」となっているわけだ。さらに、傍線部7で終わる文は、冒頭の「すなわち」と文末の「のである」とによって、前文の言い換えであることが明らかだから、この関係にも注目すると、「情動の文化的バリエーションに注目する」ことが「基本情動派の中心的仮定の危うさを批判する」ことに等しいと筆者は言っている。たしかに言い換えだ。解答の中心（答案末尾）はこの要素で構成すればよい。



前問と同じく、解答欄にゆとりがあるので、答案前半に対比項目を盛り込もう。「基本情動派の中心的仮定」の説明は、傍線部直前と第八段とにあり、簡単に言えば「基本情動（第二段では「情動の本質」）はヒトという種に共通の生物学的・生得的なものだ」ということだ。しかし本当にそれだけのことなら、「情動表出もヒトという種に共通の形態となる」はずで、「異文化の人と初めてじかに向き合うとき、傍線部6のずれが生じる」はずはない。ところがこれが実際には起こっているのだから、「基本情動派の中心的仮定」は脆弱で説得力に欠けるというわけだ。

#### 問8

本問においては「同音異義語の文脈による書き分け」のレヴェルまではほとんど要求されていないので、落ち着いて書けばよい。読みやすいほうが望ましいのは言うまでもないが、「美しさ」そのものが要求されているわけではない。ただし「正確さ」が要求されていることには注意されたい。「楷書」で「字形・画数」が標準的な書体と同じように見えるように書けばよい。（小学校の教科書に用いられる「教科書体」を意識すべきだとされている。）

実際の試験で本問の設問となっている語とまったく同じ書き取りが要求されるとは限らないから、時間があれば「それぞれの漢字を含む別の熟語」がいくつ書けるか試してみても、漢和辞典などで確認することを勧めておこう。